

展景

季刊

No.115



Autumn 2024

目次

畑〈短歌〉	……	布宮慈子	4
ポケットより〈短歌〉	……	梅津純子	6
お盆前後のこと〈短歌〉	……	大橋千佳子	8
ちかづいて〈短歌〉	……	小野澤繁雄	10
月見〈短歌〉	……	河村郁子	12
竹煮草〈俳句〉	……	新野祐子	14
〈那須通信 60〉 憩い	……	加藤文子	16
〈薫風颯々 34〉 狐越街道	……	神村ふじを	22

対詠〈こぎげんいかか〉 PART 91	……	小野澤／河村／布宮	26
前号作品短評 A	……		28
前号作品短評 B	……		30
無二の会短信	……		34
編集後記	……		38

今号のイメージ／マイタケ

畑

布宮 慈子やすこ

この春に新たに始めたる畑いろとりどりの野菜が生りて

鮮やかに夏野菜こそ目立ちたりキュウりにトマト、ナスやピーマン

初めてのものを植ゑれば毎日のやうに気になる小玉スイカよ

真南へ真南の方へ伸ばしゆく小玉スイカの蔓の不思議さ

好きなだけ伸びればよいと心止めをせずにおきたり放任カボチャ

畑には虫来て鳥来て蛙も来土くといふは生きもの養ふ

もらひたるサツマイモの苗五本にて秋のはじめに大き芋掘る

つれあひの選びし農のスタイルは不耕起栽培また自然農法

草刈りて捨てることなくそれぞれの野菜の根元に草マルチする

草多き畑を眺めて人は言ふ お宅のはたけ青々として

ポケットより

梅津純子

隣席の人のささやき耳打ちを聞き取れぬと知る四十路の慄き
若き上司のその早口を聞き取れず否応も無き彼我の隔たり
同じ話を聞きたる人との受け止めに違ひの多く心騒ぎぬ
否か応か肝心要語尾にあり人往々に語尾のむにやむにや

無意識に聞こえぬ個所を補ひて理解する吾か話が違ふ

左耳難聴といふ判定に片耳作りし補聴器初め

行方不明の高額補聴器二冬後スキーウェアのポケットより出づ

夢に見し補聴器つひに出でたるも悔し悔しも左耳故障

眼鏡の蔓マスクの蔓との三重を避けて作りし耳穴補聴器

命失くすまでの病か免許証眼鏡補聴器いくたび失くす

お盆前後のこと

大橋千佳子

帰省子は選択の余地なしと言う「ベジファーストでね」と並べる夕餉
介護保障保険加入の報告に息子は「ふうん」だけの返答
ゆくゆくは樹木葬ではどうかしら追い打ちかけるわけじゃないけど
近況を語れる側が参加して同級会の夜の軽やか

心配でたまらなかった幾人は四半世紀後も ちゃん 付けて呼ぶ

訥訥と中退・浪人・転職を語る男子の声は直向き^{ひたむ}

調理師の職場を渡る彼の夢は温かな定食屋開店

「えらいね」と「がんばったね」のほかは無し社会に生きる君ら逞し

願わくはガザやフクシマ、ヒロシマに関心高き中堅であれ

ヒヨドリよ残りの粒は分け合おうブルーベリーのネットを外す

ちかづいて

小野澤繁雄

スペースに車追い込む入れ方は中古車センター駐車場のもの
つゆ前の校舎は窓が開いていて校門まではこれるといふ子

日向では雨にも打たれやすきこと青年会議所花壇小さく

時間まだのこっているやカインズに砥石が減って買い換えており

蜂飼いは止めたようになるその家の軒に下がって玉葱少し

不作ということになりたる梅畑は落ち梅ひとつみることのなし

長靴の一、二、三、四、五足がならぶ庭に小さくカラフルなもの

大方は呼吸するのみの室内にパツヘルベルカノン（作業用）聴く

ゆっくりと歩いているとそのあとはそれしかできぬ移動している

ちかづいてちかづききれぬ数の窓小校庭によりゆく歩み

月見

河村郁子

名月は暦の上の十五夜の一日遅れ 明日の夜は曇りの予報

杖つきて散歩コースの公園へひとり月見す 園に入らず

中空のまんまるお月様眺めゐて父よ母よと月見をしのぶ

疎開どき祖母さま月見て言ひたりき「月と親とはいつも良いなも」

思ひ出づ秀山荘に山靴を求めて仰ぎし駿河台の月

心なしか月にかすかに橙の色 月も猛暑をしのぎゐるらし

菩提寺の墓所を月光照らすらん 独りで見に行くところにあらず

街路灯にわが影くつきり いつしらに月のひかりを受けてほんのり

新しい『プロジェクトX』は「はやぶさ一号」カプセル遺して火花に散りし

噫、われに遺せるものはなかりけり 悪しき印象は残さずを銘

竹煮草

新野祐子

転倒はブロッケンがんどさんのせい雁戸山

緑の夜打ち身の青の迫り来る

杉皆伐魑魅すだまのごとく竹煮草たけにぐき

乱心の吾わをかなかなの中に置く

渾身の力の色のトマト挽ぐ

草刈女「蛙逃げて」と言ったのに

「うすにごり」とう焼酎媚薬入りか

「荒野に希望の灯をとます」自主上映会より三句
アフガンへ及ぶ想いよ台風来く

カンパ箱びつくり箱となり白秋

さわやかに笑み交わし合い帰るかな

憩い

加藤文子

数年前、黒磯駅の隣に近代的な図書館がオープンした。カフェもあって、たくさん利用者でにぎわっている。

那須の森の中でパンを焼いているIさんの休日の愉しみは、お弁当持参で図書館で過ごすことなのだろう。天井も高く広くとした館内で、本に囲まれてお弁当が食べられるというのも、いい。

休日？ 私の休日はどんなふうなのだろうと、改めて思った。植物を友とする盆栽屋には、休日の習慣はない。家業も盆栽だったので、夏休みに懇意にしている植木屋さんに水やりをお願いして一泊で旅行にでかける、それが唯一家族が共にする休日だった。

そんな環境で育ったせいか、休日のない生活に不自由さも感じず、当たり前前に思って過ごしてきた。

展覧会で在廊する時や、仕事の打ち合わせなどの用事で家を空けることはあっても、休息を目的



に留守にすることはない。

楽しみ方は人それぞれ。特別観光するわけではなくても、展覧会で遠方に赴いて、知らない街や人々に出会うのも新鮮で楽しい。そここならではの風土が醸し出す空気というものがある。私にとっては、それがささやかな旅行とでも言える。日常を俯瞰でながめるような時間も大切に思える。

訪ね先で得たよろこびの気持ちをおみやげにして帰宅する。出掛ける前の私とはどこかが違っている。

日常をぬうようにして時々そんな機会を得る、それくらいでちょうど良い気がする。

一年の大半を自宅で過ごしているわけだが、日々刻々と変化しつづける植物との生活は飽きることがない。

朝露にぬれた庭、一日が終わろうとする時、夕陽に映し出される黄金色に染まる植物、ひとコマ、ひとコマが胸をうつ。

風知草の一年のめぐりを記したメモがある。

シヨットOne 真冬の冷たい風の中で前年に活躍した茎が立ち枯れて、花穂と一緒にポキポキと折れながら落ちて行く。その元では待機していた尖ったアズキ色の新芽たちが勢揃いして姿を現す。

シヨットTwo ゆっくりゆっくり、巻き込まれた新芽が開いて顔を出しはじめる。早春の光に誘われて外気に触れたミドリたち。

シヨットThree 瑞々しい若葉が出揃って、風に揺れている。

シヨットFour 充実した青葉が風にそよぎ、その優雅な姿に涼を覚える。

シヨットFive 汗をぬぐいながら水やりしてたら、葉の先端から花穂がのぞいているのを見かけた。秋が……。

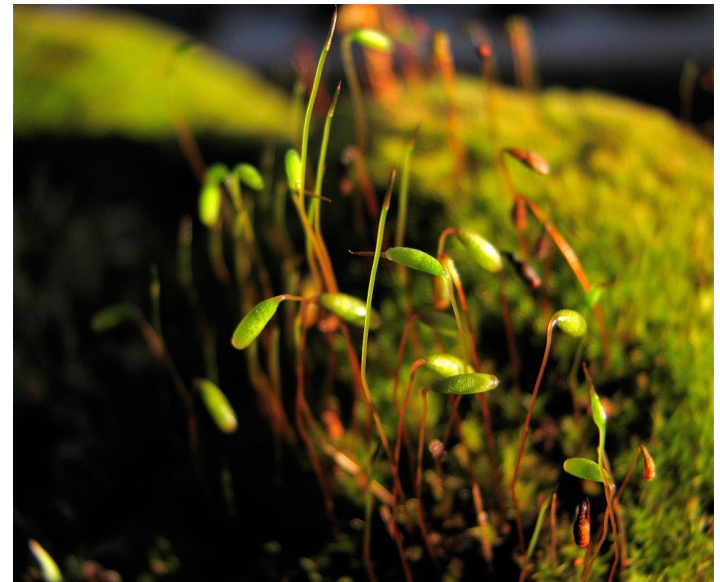
シヨットSix 花穂がふくらんで、たおやかなカーブを描く。一年の充実、一年の満足、徐々に草紅葉が展開されて、フィナーレに近づく。

たくさんの美しい瞬間に立ち合わせてもらえる。休日という区切りはなくても、日々とどこどころに憩いのひと時が含まれている。

これで、いい。

J・R・ヒメネスの『プラテロとぼく』の中にこんな一節がある。

「ねえプラテロ、僕たちの魂が偉大ですよやかな大自然に肉体を本当に自分のものとして感じるのは、自分の心掛けしだいだよ。自然というものはね、大事にされたときに初めてきらめくような永遠の美の光景をそれにふさわしい人にだけおとなしくくりひろげて見せるものなのだよ」時々思い出しながら、うなずくのである。



静かに息をすって…

狐越街道

神村ふじを

山形には多くの峠越えの道があるが、村山地方と置賜地方を結ぶ「とんと昔」に出てきそうな名前の街道がある。狐越街道である。

山形城下から置賜上杉領の北端（現 西置賜郡白鷹町）に至る道筋は、江戸時代には狐越・中越・築沢の三道があったそうだが、明治20年（1887）、狐越の新道が開削されて狐越街道と呼ばれ、これが主要道となった。その後狐越街道は改修され、現在は白鷹山の北側を県道17号線（主要地方道山形白鷹線）が通り、県都山形と置賜を結ぶ主要道の一つとなっているが、この道筋は明治の狐越街道とは異なっている。

白鷹山は、山頂に行基の開基と伝わる虚空蔵尊を祀り、村山地方と置賜地方の境に位置しているため、境虚空蔵とも呼ばれている。何でも行基が当地を訪れた際、山上に白鷹が舞ったとの伝説があり、山の名前の由来となっている。名君の誉れ高い米沢藩第九代藩主上杉治憲は、隠居後この白

鷹山に因み自らを鷹山と称したと言われている。

この狐越街道は、虚空蔵尊への参拝路としても村山地方と置賜地方を結ぶ連絡路としても重要な役割を担っていたのである。特に明治になってから、桑の葉が行き来する商業の道として繁栄したのである。

お蚕様と様付けで呼ばれる蚕。絹糸の原料となる繭を吐き出す貴重な蚕。白鷹山を境にして、東側の西山形周辺と西側の荒砥周辺では、桑の葉が開くのに一週間ほど差があったようで、西山形周辺の桑が盛んに置賜地方に運ばれた。さらに、西山形柏倉村の名主伊藤五郎治が作ったと言われる、寒さ、病害虫に強い桑の新品種（五郎治早生）が現れ、物流に拍車を掛けた。

製糸が一大産業になりつつあった時代、五郎治早生が西山形周辺で栽培されるようになると、養蚕地置賜では桑の葉の需要が急速に高まり、膨大な量の五郎治早生が白鷹山を越え、山形から置賜へともたらされることになった。その通り道となったのが狐越街道だったのである。

ところが、その繁栄もやがて終わりの時を迎える。大正12年（1923）、奥羽本線赤湯駅から荒砥駅まで長井線（現 山形鉄道フラワー長井線）が全線開通したのである。この開通により荒砥から鉄道で奥羽本線と連絡できるようになると、もっぱらこちらが利用されるようになり、狐越街道の往来は次第に減っていったのである。

戦後の昭和25年（1950）には、現在の県道17号線（主要地方道山形白鷹線）の畑谷を回る道

がバス道路として整備され、バスが行き交うようになった。

そして平成4年(1992)に国道348号線 小滝街道が大改修され、荒砥から山形まで約40分で結ばれるようになるまでは、西置賜と山形を結ぶほぼ唯一の幹線道路として利用されていたのである。この改修により狐越のバス道路は、現在は国道348号線を通る路線となり、山形から長井まで運行されるようになっていた。

まだバスが県道17号線を通って山形と荒砥を結んでいたときのこと。バスは山形市の山交ビルから発車。山形駅西側の停留所を数カ所回って門伝もんでんに至り、富神山とみやまを右前方に見ながら次第に高度を上げて行く。山王、七ツ松、萩窪、礫石ついでいしと、坂道と急カーブの連続となり、やがて畑谷大沼に着く。ここからは荒砥に向かいゆっくり下って、中山、萩野、十王を経て終点の荒砥。

山交ビルから乗ったばん(婆)ちゃん。市内を巡っている間にうとうとし始めた。近くで降りる気配はまったくない。バスは門伝を過ぎ山王、七ツ松、萩窪を通過、礫石の停留所に近づいたとき、ばんちゃんはやっと目を覚まし、慌てた様子で運転手に声を掛けた。「七ツ松で降りんなだけんと、乗り過ぎしてしまはずは。運転手さんあんまり運転上手で眠らしてしまたけのは」。運転手はうんうんと頷き礫石に停車。バスの運転台から降りると手を挙げて山形方面に下っていく車に声を掛けた。「このばんちゃんば七ツ松まで乗せてってけねが」。話は「はい了解」。ばんちゃんを車に乗せてバスは出発。

こんなことは令和の今の時代はできないのかも知れないが、何とほのぼのとしていい話ではないか。お互いを思いやるちょっとした気持ちがあんなにもすがすがしい気分にしてくれる。こんなちょっとした思いやりがそこそこにあつたら、まだまだ住みやすい世の中になるのではと思う昨今である。

立秋や風まだぬるし狐越 ふじを

*参考サイト「新・県民ケンちゃん」狐越3

http://psyzans.com/Newken/Kitsume/Kitsume_3

N K O
 小野澤繁雄
 河村 郁子
 布宮 慈子

連日の溽暑にOS-1^{オースワン}抱き冷房蟄居の夏眠動物
 7月25日 K

雨マークゆ晴れマークとぞ変はりたる天気予報の七変化なり
 8月1日 N

花多く葉も片づいて夾竹桃夏校庭に木の花少な
 8月5日 O

隣家の夾竹桃の花を掃く真夏日続く朝の日課に
 8月14日 K

夏の間を薄紫に咲いてをり木槿といふは葵科の花
 8月18日 N

酔芙蓉いろのいくつか保たれてその家の庭の大方影は
 8月21日 O

酔芙蓉おほらかに咲き萎みたる友の一世のまぼろしもがも
 8月21日 K

大施食法要ありて懐かしき友と出会ひぬ寺の本堂
 8月25日 N

一どうという言葉その大人っぽさだい二十八かいそつえんじ一どう
 8月25日 O

菩提寺の定例施餓鬼法要に卒塔婆^{そとば}四本収むる役目
 9月1日 K

秋めいてくれば思ひぬ仏壇に秋明菊を飾りし母を
 9月14日 N

いつもなら花みるところバス停に秋の実成りて柿に柚子の実
 9月16日 O

ようやつと彼岸中日秋もやう葡萄ピオーネ仏壇に鎮座
 9月24日 K

やうやくに落ち着いてきて秋の陽をトンボと蛙とともに浴びたり
 10月5日 N

鉢花が同じ花なるつながりは隣家つながりそのあるなし
 10月8日 O

朝方の冷氣に寒露と思へどもきのふの猛暑がふいになつかし
 10月9日 K

雪多き大井沢さへ暖かく木の子の育ちも今ひとつなり
 10月18日 N

一晚で寒くもなつてそのその朝^{あした}冷^{つめ}たばかりの自販機に一つ
 10月21日 O

昼下がりの銀座通りを吹き抜ける木枯らし一号ヒジャブを捲る
 11月9日 K

前号作品短評A 〈小野澤〉

●線状降水帯の痕生々し蜀魂^{ほとしぎす}

新野祐子

一連タイトル「小白川こじらかわに遊ぶ」から。この線状降水帯は令和四年八月三日からの置賜中心に発生した線状降水帯のこと。河川では、荻生川はぎゅう・小白川の溢水被害が甚大だったことが知られている。全国区のニュースになっていたことから記憶にもある。蜀魂しよこん（しよこん）はホトトギスの異称で、同じく杜宇、不如婦ともに中国の故事や伝説にもとづくもの、という。いずれも治水や農耕に関係するところから、句意にも合っている。夏の季語。復旧事業も現在進行形であり、痕生々しである。痕は爪痕、傷痕に同じか。

全体にイメージは再現性そのもの、みているのは現実。

ロケット花火の句。通販サイトでみても種類が多く、鳥獣除けとうたつてあるものもある。それで、この二句。二句目の調子、ナラティブな感じがいい。

ロケット花火とう熊除けのあり蔵山

バードウィーク ロケット花火は暴力です

夜衾草よふすまそう、山瑠璃草（やまるりそう）は山菜、山野草（以上六首目、七首目）。しらなかつたが、

そこで（東北、福島県が北限）みる、採れるものようだ。

●わたしにもできるかもしれない剪定を道具は揃つてゐるのだから 布宮慈子

独特な調子だが、一連全体で言葉は剪定のように、しっかりと見分けて使われている。なによりも道具の話を中心に、切り方の話、それと相手。荒れ放題の庭であり、コニファー、ツツジ、ヒバでもある。コニファーはしらなかつたが、針葉樹の総称で、ヨーロッパに自生する（輸入）針葉樹を呼ぶ、という。日本に自生する松などには、呼ばない。

生垣などの剪定を、女性がしているようなことは散歩中にみることがある。昔、庭のある家にすんでいた頃は、剪定の本を買ってやっていたが、切り方のほか、それぞれに時期がある。

三首目、今は動画をみる。ユーチューブにも推しのをり（四首目）、なのだ。

落ち着きて剪定とふもの考えて専門家らの動画みてゐる

取り組み（方）としての剪定。もともと残っていた道具はあつたよう。

残りたる剪定の道具多けれどわれにはゴツく肉刺まめが二つも

推しの推す道具を買ひて使ふとき程よき木ばさみ、剪定ばさみ

程よさ。また、このようなことにもなる。作業でもある剪定、作業記録でもある短歌。

剪定は孤独な作業われのみとまた亡き人と語らふごとし

前号作品短評B 〈慈子〉

●大人のカラオケ唄ふに走り出で幼は踊る食ふを忘れて

梅津純子

カラオケに反応する幼い子どもが、食えることを忘れて踊っている。親族の会食の場面だろうか、大人に混じって食事をしていても幼児は音に敏感で、ひとりでに踊り始める。

カラオケに踊り続ける三歳児の手振り足踏みつひにはスピン

言葉未だ僅かなれども踊り止まぬ幼児に想ふ人と踊りを

くると回り回ったりして、夢中で踊り続ける幼い子どもは微笑ましい限りだが、作者の観察はそれだけでは終わらない。その中に人の歴史における踊りの原初を感じたのだ。

空を指す一本の筆山峡の巨杉覆ふ藤の紫

タイトルの「空を指す筆」は杉の大木を覆っている藤の花の形容だった。日本中、山の手入れができなくなっている現在、藤蔓が絡んでいる杉をたくさん見かける。それは一見、紫の花が美しく咲いているだけだが、別の角度から見ると藤蔓に苦しめられている木にも見える。自然の中の生存競争は厳しい。

●これから雨という校庭に声は漏れ手塚さんどこの教室にいる

小野澤繁雄

おもしろい歌だ。校庭の音が響いてくる距離にいる作者。雨が降るときは音が大きく聞こえたりする。そんな状況か。「手塚さん」という固有名詞も効いていて、ぐっと親しみのある作品になっている。

駅が違ってくらしも違っているような妹の三十年われの三十年

LINEその「お友達登録」の案内が松本町の掲示板にある

きょうだいでも長く離れて暮らしていると、さまざまな違いが露わになることがある。しかし、具体的には何も語らず、互いの三十年を感慨深く捉えている場面だ。後者のLINEの歌は、公共の場所にも「お友達登録」を促すような掲示があり、わずかな違和感を示しているのだろう。たしかにケータイのLINEは写真の添付も簡単で便利なものだが、何でもかんでも登録していたら、ケータイに振り回される事態になりはすまいか。筆者は「お友達登録」というネーミングも、いかななものかと思っている。

●物置の奥のおくより出で来たる古きアルバム 吾のものならず

河村郁子

人手を使って物置をぜんぶ片付けたという作者。自分が知らないものばかりだが、奥から古いアルバムが出てきて、それを見つめている。



亡き長姉の（女学校）卒業記念アルバムが籠りしままに木箱より出づ
目を留めし一葉ありぬ いもうと吾の七五三の祝ひの姿

いろいろなアルバムが出てくるなかで、長姉の方の卒業アルバムや若いころの写真に懐かしさでいっぱいになる。さらに、自分と妹の七五三の写真まで出てきた。作者は遙か昔をしのびながら、物置に入ったままになっていたアルバムや被写体の家族に対して、感謝の気持ちを忘れない。

戦災を逃れ転居に改築に籠りしままに見守りくれしや

◆「戦雲」——十一月十日、長井市で「戦雲」を上映する。この十年間沖縄の基地問題をドキュメンタリー映画で鋭く提示してきた三上智恵監督の最新作である。過去四作「標的の村」「戦場ぬ止み」「標的の島 風かたか」「沖縄スバイ戦史」すべて長井市で、新野祐子さんたち仲間と自主上映してきた。「戦雲」は宮古・八重山諸島に、自衛隊の（米軍では無い）ミサイル基地計画が出てから完成までの地元民たちの様々な姿を追う。「国防」ではない、自ら「標的にされる島・日本」を造り、戦争へと進むこの国の現状を観る者に問う。ポスター、チラシに上映日時を入れ、上映実費捻出の二百五十枚販売に向け仲間たちと手分けして動きだしたが、私自身は心身アップアツプでもある。

梅津純子

◆「展景」No.115を繰ってみると昨夏も暑かったのだな、今年はとりわけと言いついて不活性化していたが。梅の実が十粒しか生らず梅干し作業ができなかったという、暑い日差しの有効利用がなかったせいもある。それでもお盆のころになり人が動く、心身も動くようになる。自分の将来（終活？）を具体的に考えたり、言い置くことをまとめてみたり。また、今夏は二〇〇〇年度中学卒業生のクラス会に参加し、大人同士なんだか師弟なんだか混然とした交流を楽しんだ。普段はあまりないが、何かの機会での年代と接すると、年齢構成比によらず、若い人・中堅諸氏にこそ時代を背負ってもらっているのだと実感する。

大橋千佳子

◆乗り鉄を始めて、一年はたつよう。土日、日帰りでいけるところまで、ということのみで関東甲信越のおもな線に、乗ってしまう。これ以上は、宿泊をすることになるな、とおもう。この踏ん切りがつかないので、近場の東武日光線に乗ったり、富士急行に乗ったりもした。後者は、ローカルでお祭り気分といった鉄道だった。外国人が多く、河口湖駅前の狭い足湯（冷たい）に一人つかっていたら、家族連れが入ってきた。身延線に乗り、小海線（これは初めてではない）に乗った。中央本線を使うが、普通は切れ切れで、通し運転が少なく、特急の通過待ちがあることになる。身延線でも同じで、一時間に二本のうち一本が特急で、通過待ちがある。身延線では、静岡県との県境で雷雨にみまわれた。ターミナルの富士駅で落雷、停電で信号機がうごかなくなり、東海道本線に遅れが出てしまう。このときは、ひさしぶりに三島からもどるのにこだまに乗った。いき、あるいは帰りで、または両方で新幹線をつかうこともある。時間的余裕はないことが多く、最小限、駅前に下車するぐらいだが、それでもしれることはある。連続16（17？）駅無人駅という磐越西線に乗った。多くで車内広告が減ったのか、中吊りも含めて使われていない。ホームの看板も枠だけと

いう駅もある。線路には、草ののび放題というところもある。ここまで乗って記憶に残る線（駅）も数多い。そうしてこれでは線が残らないという感じもある。

小野澤繁雄

◆暑い、とにかく暑い夏だった。エアコンなしでは暮らしていけない夏だった。子どもの時はエアコンなどなかったもので、暑いことは暑い気がしていたが、子どもだし夏とはこういうものだと思うっていたのだろう。そう考えると、大人になるいは年をとるといことは、何とどらしのななことかと思ってしまう。熱中症は屋外よりも屋内が多いとテレビが伝えていた。だとしたらだらしのないなどとは言っておれない。エアコン様々である。「エアコンのリボンの揺らぎ昭和床」

神村ふじを

◆なんとも暑い夏でした。気象予報に「今までに経験したことのない」とか「猛烈な」の修飾語が付けられていました。高齢者は身を護ることに専念しますが、一日中冷房の部屋に蟄居するので、心身のフレイルを予防して夕方の風を頼りに歩行を励行していました。秋に向け心身ともにリセットの準備をします。

河村郁子

◆八月初めの早朝、用事があり近くの本木勝利さんの家を訪ねたら、本木さんの友人二人と頭を突き合わせて何やら話し込んでいた。本木さんの家のすぐ側にあるビニールハウスのビニールがめちゃくちゃに破られ、中に干してあるブラックバスが落とされて土まみれになっていたというのだ。クマカイノシシかどちらかで、この猪突猛進ぶりを見るとイノシシが犯人ということになった。彼らはその日のうちに、あの猛暑の中、ハウスの回りの草刈りをして、ホームセンターから買ってきた電気柵を仕付けたという。彼らは最上川のボスとなっているブラックバスを退治するため、ブラックバスを釣ってきた人に一匹いくらとお金を払い、そのブラックバスをハウスで乾燥し粉碎して肥料を作っている。それで育てたサトイモを食べてもらうというプロジェクトを、数年前から始めている。翌日からイノシシは来なくなつたとのこと。電気柵の説明書にはイノシシに効果があると記されているのは当たっていた。先日、昨年のブラックバス肥やしから作られたサトイモをいただいた。とろとろ滑らかなイモ煮を感慨深く味わった。本木さんはスイカも栽培している。クマは電気柵なんてへっちゃらで、スイカ百個のうち六十個はクマのごちそうになったという。クマの被害はもう四年くらい続いているが、本木さんは懲りずに今夏もスイカを作った。商標登録は「寝ての番スイカ」だそうである。

新野祐子

◆九月に引越してきて片付けその他するべきことが多すぎて、今号のアップが大幅に遅れてしまいました。お詫び申し上げます。

◆しばらく前から気になる語が増えた。「レンチン」は話し言葉でよく使われるようになっていく。レンジでチンを短くいうことができるからだろう。また、「ととのう」とは、サウナ用語の一つらしい。おもにネットで使われるので、調べてみたら、「ととのう（整う）」とは、サウナ・水風呂・休憩のセットを繰り返すことで得られる、心身ともにとても調子がいいと感じられる状態のこと、だという。さらに先日、「ハブる」という語を会話のなかで聞いた。「ハブる」は仲間外れにする、省く、無視する、拒否することを意味する若者言葉らしいが、若者でない人がふつうに使っているのに驚いたのだ。言葉は生きもの、時代とともに変化してきたわけだから、新しい使い方が現れるのも当然と言えば当然のこと。これらの新しい語が、いつまで生き延びられるか見てみよう。

（布宮慈子）

muninokai.com

113号より上記サイトのオンライン版発行のみとなっています。

季刊展景
115号

二〇二四年十一月二十日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形県西村山郡河北町谷地庚79

info@muninokai.com

Copyright © 2024 MUNINOKAI. All rights reserved.